

サーキット・ライダー 2004年 2月

苦難節を前に

我が主イエスよ、ひたすら祈り求む愛をば。増させたまえ主を愛する、愛をば、愛をば。

世の喜び楽しみ、求めたりし見なれど、今は願う主を愛する、愛をば愛をば。

来たれ、来たれ、苦しみ、憂き悩みも厭わじ。勇み歌わん主を愛する愛をば、愛をば。

今際の息微かに残る時も愛をば。増させたまえ主を愛する愛をば、愛をば。

讃美歌 21, 483 番。詞、Elizabeth P. Prentiss

モンテーニュは”The continuous work of our life is to build death.” 「人生において為すべき勤めは死を迎える事である。」(私訳) と言いました。また、度々引用しますが、一休和尚は「元日は冥土の旅の一里塚、嬉しくもあり嬉しくもなし。」と詠いました。旧約聖書のコヘレトの言葉にも同様の人生観が表されています。「コヘレトは言う。なんという空しさ、なんという空しさ、すべては空しい。太陽の下、人は労苦するがすべての労苦も何になろう。」(1:2)「わたしはこうつぶやいた。「快楽を追ってみよう、愉悦に浸ってみよう。」見よ、それすらも空しかった。」(2:1)「何事にも時があり天の下の出来事にはすべて定められた時がある。生まれる時、死ぬ時、植える時、植えたものを抜く時・・・泣く時、笑う時・・・愛する時、憎む時、戦いの時、平和の時。」(3:1-8.)「神はすべてを時期にかなうように造り、また永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない。」(3:11.)

これらの人々は決して悲観的な人生観を持っていたのではないと思います。ただ真実を見極めようとした。ではその真実とは何かと言うと、私達が「生まれた」こと、やがては「死ぬ」ということです。私達は日頃、人生における真実を見ようとししない傾向があるように思います。特に若いうちは。生まれてきたから今存在する。しかしやがては老いて死ぬ。或いは不慮の事故で命を奪われる事もある。私達は実に弱い存在です。肉体的には病気になったり、怪我をしたり、精神的には、人との諍いで傷ついたり、自分のことでコンプレックスを持ったり、将来に悲観したり、出会いがあり別離があり、その都度一喜一憂する。実に様々なことが人生の中で起こりますが、人はそこでどう生きるか、自分が生きている事の意味をどう見出すかが問われているように思います。

職業柄、色々な方と出会い、関わります。闘病生活をしている方、その中でも更に死が間近に迫っている方、対人関係で傷ついている方、心も体も疲れている方、自分が何をすべきか分らない方、また開き直った生き方をされている方など等。一見、幸せそのものに見える方でも、その人生の一端を伺うと様々な悲しみや辛い出来事を乗り越えてこられたことを知り、驚きと同時に敬服せずにはおれなくなります。またその反面、何でも悲観的、消極的に捉えてしまう方もいます。クリスチャンも例外ではありません。「どうしてこのような違いが出てくるのだろう」と、よく不思議に思います。

文頭の引用は「わが主イエスよ、ひたすら」という讃美歌ですが、作者エリザベス・ブレンティスは若い頃はこの世的な思いに駆られ、人と同じく贅沢を求めたり、楽な暮らしを追ったりしました。が、避けえない悲しみや苦しみ、辛さや喜びを経験する中でイエスの愛を求めることこそ生きる道だと確信しました。そこで彼女はかつて自分が避けようとし続けた苦しみや憂いをも前向きに捉え「来たれ、来たれ」と言い放ちました。晩年の彼女には憂い、悩みも「厭わない」強い信仰が与えられ、苦しみにある時ほど、尚声高らかに「主イエスを愛する」ことを歌い、褒め称えました。何故なら、イエスご自身も苦しみ、苦しむ人の思いを知り、いつでも共にいて下さることを知ったからです。

私達は苦しいこと、悲しいこと、憂い、悩みなどに遭遇すると、つい悲観的に捉え「自分だけが何故？」とか「皆、自分のことなど分かってくれない」と思ってしまう。クリスチャンでも同様。苦しみや悲しみの中には信仰があろうと無かろうと避け得ないものもあります。そのような時にどう対応するか、それでも神を讃美できるか、それでも祈れるか、それでも神、人を恨まず前向きに生きていけるかどうか。信仰をもって生きるということは、どのような時にも神に愛されていることに感謝し、もっと神と人を愛せるようになりたいと望み、高らかに讃美することではないでしょうか。

この苦難節、もっと「主イエスを愛する、愛」を求め続けたいと思います。

吉松 純